



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3724 号 2017.6.18 発行

浮気・暴力・ギャンブルなしならOK…ではなかった 妻に嫌われる夫8タイプ



産経新聞 2017年6月17日

浮気やDV、ギャンブル依存症など、誰の目にも明らかな「ダメ夫」が世の中には存在する。だが、自分は浮気はしないし暴力もしなければ賭け事もしない。だから“自分はマトモだから大丈夫”と思っているそこのアナタ。実は気づかぬうちに妻の地雷を踏みまくっているかも！ 妻から嫌われやすい夫のタイプについて、カウンセラーに聞いてみた。

まるで大きな息子！手のかかる夫にイラッ

お話を伺ったのは、ふい〜めえる・みしま代表、夫婦問題カウンセラーの中西由里さん。

(1) 自称イクメンタイプ

『育児は妻の仕事』という感覚で、自分は手伝えばよいと思っているのがこのタイプ。子育てに主体的に関わろうという意識が低く、ちょっと手伝っただけで子育てをやったつもりになっています。やりたいことだけやりたがり、やりたくないことを頼まれると『え〜。俺、仕事で疲れているのに』と言って断る。おむつ替えをするのは『小』のときだけ。『大』は見て見ぬふりをしがちです」(中西さん)

(2) ホメてホメてタイプ

「自己満足なサプライズや、相手が望まないことをして『俺、すごい?』『俺、気が利く?』『俺、優しい?』と無言の圧力をかけてきます。妻は褒めること、感謝することを求められているようで、本音が出せずに疲れてしまいます」(中西さん)

(3) ばなし夫

「ものを出したら出しっぱなし、服を脱いだら脱ぎっぱなし。新聞読んだら、読みっぱなし。妻は、片づけ、補充をして回らなければならないので、家政婦扱いされていると感じます」(中西さん)

父親の自覚がなかったり、妻の目には息子が一人増えたかのように感じさせるのがこれらのタイプ。自分の夫や父親が当てはまる！という人はかなり多いのではないだろうか。

わたしたちって本当に家族？責任感&コミユカゼロ

続いて、少々攻略が難しくなるのが次の3タイプ。

(4) 自己主張ゼロタイプ

「このタイプは話し合いからすぐ逃げます。口癖は、『俺はいいから』『お前に任せる』『何でもいいよ』。そのくせ『俺はいつもお前に合わせてきたじゃないか!』と突然ブチ切れる。本人は、争いを避けたいだけの平和主義者ですが、妻はつながりが感じられず寂しいし、大事なことを自分一人で決めなくてはならなくて不安に陥ります」(中西さん)

(5) 未だに独身気分タイプ

「家族と離れて独りになりたがり、趣味や地元の友だちなどを優先します。家族と一緒にいるときも、ゲームなどをやっています。自分の世界に入り込んでいるので、話しかけ

でもロクに聞いていません。妻にとっては結婚ではなく同居生活をしているようで、虚しさを感じます」(中西さん)

(6) 自分だけ特別タイプ

「自分だけ別もの食べる、自分だけ高いものを買う、自分だけ寝る。夫としては、日ごろの苦勞が報われていない辛さがあり、『こんなに頑張っているのだから、これくらい許されるだろう』という思いでやっていますが、妻の目には、わがままで自分勝手にしか見えません。子どもに示しが付かない上、何より腹が立ちます」(中西さん)

いずれも、コミュニケーションを取れば解決しそうに思えるが、妻が話し合いを求めてもまともに応じようとしなため、夫婦間の溝はさらに深まっていく。

ここまできたら即・離婚!? モラハラ系ダメ夫

最後に、妻の自尊心を傷つける2つのタイプをご紹介します。

(7) ムカつく上司タイプ

「なんでも管理したが、自分のやり方、自分のペースを貫こうとします。突然の予定変更を嫌がり、妻の意見は却下。自分本位で威圧的、夫婦関係に上下関係を持ち込みます。妻は、常に夫に合わせなければならず、息苦しさを感じます」(中西さん)

(8) 打倒妻! タイプ

「妻の間違いが大好きで、正論で妻を裁きます。『お前にはわからないだろうな』『そんなことも知らないの?』『その話、オチはあるの?』など、妻を見下すような言い方をします。俺の方が大変というアピールをしたり、妻の実家をけなしたり。あの手この手で妻より優位に立とうとするので、妻は自尊心が傷つき、自信を無くしていきます」(中西さん)

いずれのタイプも、妻を傷つけるのが目的ではなく、自分の不安を解消するためにやっており、妻が嫌がっていることに気づいていないケースが多いのだとか。少しでもドキッとした夫は、妻に愛想をつかさされる前に、要改善だ! なお、「教えて! goo」の「妻に嫌われる夫はどんな夫だと思いますか?」という投稿にも様々なタイプが紹介されているので、こちらもチェックして欲しい。(酒井理恵)

【脳を知る】認知症予防 歩く速さに気を付けて! 産経新聞 2017年6月18日

青の間に信号を渡り切れなくなると、高齢からくる「虚弱」に要注意



フレイルという言葉を知っていますか?これは日本老年医学会が平成26年に提唱した概念で、健康な状態と何らかの介護が必要となった病的な状態の中間のことを意味します。すなわち多くの高齢者は健康な状態からフレイルの時期を経て要介護状態になります。

フレイルとは「虚弱」という意味なのですが、分かりやすく言うと、「年のせいで足腰の力が衰えてきて、立って歩くのも一苦勞」といった状態のことで、今までは老

化現象や老衰とされ、悪化する一方で元には戻らないと考えられてきました。

しかし、フレイルという概念には「なりかけても元に戻る」という意味も込められています。フレイルは身体的な虚弱だけでなく、認知症や鬱などの精神的な虚弱、貧困や独居などの社会的な虚弱も含まれている大きな概念です。なかでも寝たきりにつながる身体的なフレイルが最大の問題点で、厚生労働省も対策に乗り出しています。

フレイルの定義は(1)体重減少(2)疲れやすさの自覚(3)日常での活動量低下(4)歩行速度の低下(5)筋力(握力)の低下の5項目で、このうち3項目が当てはまればフレイルと診断されます。

このなかでも特に重要とされているのが、歩行速度と握力の低下です。歩行速度は秒速80センチ以下、握力は男性26キロ未満、女性18キロ未満が、低下と判断する基準と

されています。横断歩道は秒速100センチで渡れるようになっているので、信号を渡り切れなくなると要注意ということです。

このように歩く速さが身体的な健康のバロメーターになるわけですが、これは脳の健康にも影響します。そう、歩行速度は認知症になりやすいかどうかの重要な指標になることが、最近さまざまな研究でわかってきたのです。

スイスの研究によると、健常な1153人を追跡し、アルツハイマー病になった人とならなかった人、その中間の軽度認知機能障害になった人の歩行速度を比較すると、認知機能の低下が重度な人ほど歩行速度が遅くなったことが確認されました。また、日本の研究では歩行速度の低下と脳萎縮の程度が関連すること、米国の研究では歩行速度が遅くなることにより認知機能低下を早期に予測できる可能性があること一などの報告が相次いでなされています。

しかし、フレイルという概念は先に述べたように回復可能な状態をいいます。認知症予防のため、筋力をつけて速く歩けるようになりましょう。

(県立医科大学 脳神経外科准教授 小倉光博)

農繁期の馬鈴薯収穫を手助け 三島の福祉施設利用者 静岡新聞 2017年6月18日



三島馬鈴薯の収穫作業を行う施設利用者＝三島市笹原新田

福祉施設利用者らが収穫や農繁期の農家を手助けする事業が16日、三島市内で始まった。農家と福祉施設が連携し、農家の人手不足の解消につなげる狙い。

同市笹原新田のジャガイモ畑で、就労支援A型事業所「ワンルーチェ」の利用者と同施設職員計10人が三島馬鈴薯（ばれいしょ）の収穫作業に取り組んだ。農家の指示を受けて、馬鈴薯を掘り起こした。

三島市とJA三島函南の共同事業。繁忙期の人手不足に悩んだ農家が同JAに相談し、同JAと市が市内の障害者施設に参加を呼び掛けた。今後、ほかの農産物でも活動を展開する予定。

JA三島函南指導開発課の日吉誠課長は「生産者から助かっているとの声も聞かれてよかった。雇用創出になり、人手不足の解消にもなれば」と話した。

環状線探訪企画が一周 森ノ宮医専の無料情報冊子 大阪日日新聞 2017年6月18日



森ノ宮医療学園専門学校（大阪市東成区）が発行する無料の情報冊子「ここ+から（PLUS）」。学校の広報戦略の一環として発行したが、JR大阪環状線沿線の飲食店や史跡を紹介する巻頭のまち歩き企画が人気だ。このほど発行された最新号でついに環状線を一周。専門である東洋医学ではなく、まち歩き企画に光を当てた意図とは。

人気のまちあるき企画が大阪環状線を一周。「今後も幅広い世代に情報を発信したい」と話す森永さん（右）と清水尚道校長

同校は1973年に大阪鍼灸専門学校として設立。2000年に柔道整復学科を開設し、現校名になった。生徒獲得の活路を見いだしたのが誰でも手に取ることができる情報冊子の刊行だった。

テーマに据えたのは、「健康」と「地域活性」。編集長を務めた総務広報課の森永理恵子さん（43）は「健康情報だけだと興味を持つ人が限られる。まち歩きしつつ、おいしい物を食べるのも健康につながる。地域の店を紹介し、そこに住

む人が健康になるのも地域活性化だと思った」と振り返る。

13年9月に「0号」を発行し、学校の所在地である森ノ宮―緑橋を紹介。その後、15号まで環状線の各駅周辺を取り上げて一周した。

取材と記事執筆は森永さんと冊子を印刷する東洋紙業（同市浪速区）のクリエイティブディレクターの染村剛さん（53）。二人とも取材経験がなかったが、「とにかく歩き回って」（森永さん）体当たりで取材した。

毎号、場所の確認を含めて300店をチェックし、実際に食べておいしければその場で取材を申し込んだ。冊子は反響を呼び、当初の5千部が現在は1万5千部と部数を伸ばし、近鉄鶴橋駅など各所に設置されている。また、企業とのタイアップ企画が新たに立ち上がるなど、中身も充実した。

環状線を一周し、今後の展開については未定。森永さんは「家に持って帰って家族全員が読める幅広い情報を発信したい。在校生や卒業生が学校に誇りに思ってくれるような冊子になれば」と意欲を見せている。

脱衣や指なめを強要…「スクールセクハラ」 隠蔽体質も 長富由希子、沢木香織



朝日新聞 2017年6月18日
スクール・セクシュアル・ハラスメント防止全国ネットワークの亀井さん。電話相談には、亀井さんや研修を受けたスタッフが対応する＝大阪府守口市

教師による子どもへのわいせつ・セクハラ行為が後を絶たない。守ってくれるはずの先生から傷つけられる児童、生徒たち。背景に何があるのか。

■「背景に圧倒的な力関係の差」

中学の部活動で、顧問から服を脱がされたり、指をなめさせられたりするが、「儀式」と呼んで

耐えている――。NPO法人「スクール・セクシュアル・ハラスメント防止全国ネットワーク」（大阪府守口市）に寄せられた声の一例だ。

相談は、小、中学生や高校生、親たちから年間に100件ほど。心的外傷後ストレス障害（PTSD）を発症したり過食症になったりする深刻なケースが多いという。亀井明子代表は「背景には、教師と生徒の圧倒的な力関係の差がある」と指摘する。

亀井さんによると、子どもは、内申書や部活動の選手選びなどに響くことを恐れ、教師に抵抗しにくい。尊敬していると「指導のため」との言葉を信じてしまうこともあり、加害教師は「子どもが拒否しなかった」「指導の一環だった」などと主張するケースが目立つ。学校側の隠蔽（いんぺい）体質などで教師が処分されないこともあるという。

亀井さん自身、中学校教師だったとき、「顧問に太ももをなでられた」などと女子生徒に相談された経験がある。校長に対応を求めたが顧問は処分されず、逆に、他の教師から対応を求めたことを批判されたという。「内側から変えるのは無理だ」と退職し、同ネットワークで子どもを支援してきた。

「被害を受けた子どもに『あなたは絶対に悪くない。信頼できる人や相談窓口に打ち明けて』と伝えたい。性暴力について教えたり、教師を目指す学生に予防教育をしたりする必要がある」と亀井さんは話す。

文部科学省によると、わいせつ行為やセクハラによって2015年度に懲戒や訓告を受けた処分者数は計224人で、現在の方法で集計を始めた1988年度以降で最多。対象は、自校の児童・生徒と卒業生が計99人にのぼった。亀井さんは「氷山の一角だ」と指摘する。

大阪府堺市では先月、運動部の女子生徒にセクハラ発言を繰り返すなどしたとして50

代の男性教師が処分された。4月には、女子生徒に2年にわたって十数回の性交渉をしたとして、高校の前教頭の男性（53）が愛知県教委から処分を受けている。

文科省は10年以上前から都道府県教委に対する通知で、児童生徒に対するわいせつ行為については原則として懲戒免職処分にするよう求めている。疑わしい行為があれば学校内だけで判断せず各教育委員会に報告するよう求めているという。

■スクールセクハラ相談に応じるNPO

◇NPO法人スクール・セクシュアル・ハラスメント防止全国ネットワーク（06・6995・1355、毎週火曜日午前11時～午後7時）メール：sshpzennkokunw2008@aroma.ocn.ne.jp

◇NPO法人スクール・セクシュアル・ハラスメント防止関東ネットワーク（03・5328・3260、毎週土曜日午後2～7時）メール：ssh2015@able.ocn.ne.jp

特養で喫茶サービス 水戸高等特別支援学校 交流授業、配膳や代金計算



茨城新聞 2017年6月18日

水戸市下大野町の県立水戸高等特別支援学校(岡部しのぶ校長)は15日、同市吉沼町の特別養護老人ホーム「ユーアイの家」(藤澤康彦施設長)を訪問し、日頃の専門教科で培った喫茶サービスで、お年寄りらと交流した。

訪れたのは総合サービスコース(喫茶・福祉サービス)の2、3年生男女5人と担当職員の計7人。同特養ホームのカフェスペースで、総合サービスコースの交流授業として注文の受け付けから配膳までを実践。ケーキセットなどを各テーブルに配膳し、お年寄りとは会話を楽しんだ。今回は同校で作ったカップケーキや焼き菓子の販売も行った。

喫茶サービスは3年前から、同特養老人ホームの協力で年6回実施。今回は今年2回目となる。

ケーキセットをお年寄りに運ぶ県立水戸高等特別支援学校の生徒=水戸市吉沼町

生徒たちは受け付けや各テーブルの清掃から開始。注文伝票をそろえ、釣り銭やケーキを確認。車椅子などで訪れるお年寄りの注文を丁寧に聞いて、伝票に記入し、代金を精算。ケーキや飲み物の個数管理や金銭の計算まで行った。

今年初めての参加となった2年生の石澤彩花さんは「最初は緊張してどうしていいかわからなかったけど、丁寧に対応できてよかった」と満足げ。昨年、3回授業を経験した3年生のサンタナ・亮さんは「お年寄りは聞き取りにくいのではと思って大きな声ではっきり話すようにした」と話していた。

引率した大伍恵美子教諭は「学校内では、お客さんの役は先生たちだったり、仲間の生徒だったりする。本番同様のホームでの実践は、生徒たちには得難い経験になって大いに助かっている」と感謝していた。(萩庭健司)

『〈古い〉の営みの人類学』 高齢期を主体的に生きる 琉球新報 2017年6月18日

『〈古い〉の営みの人類学』菅沼文乃著 森話社・6,696円

社会的・制度的につくられてきた「高齢者」像からの脱却が本書の目的である。那覇市辻地域の「村落共同体」と「古い」について、祭祀(さいし)や風習を交えて「社会的・歴史的背景と老年者個人との相互関係」を解き明かし、文化人類学的に沖縄社会における老いを意味づけている。と同時に、高齢者に求められてきた決まり切った役割ではなく、主体的に高齢期を生きる姿から「老年者からの老いへの主体的な働きかけ」を浮かび上が

らせていく。

本書の前半は遊郭に始まる辻地域の歴史の変遷や祭祀を軸に、6年間にわたるフィールドワークで接した辻に住む老年者のヒストリーを重ね合わせて、時代に翻弄（ほんろう）されつつ自らを生きる老年者の姿が描かれる。筆者が接してきた老年者たちと郷友会にも触れ、おそらく地元を知る人にもリアルな表情が浮かぶ。一方で、辻地域がたどった空白の歴史や色濃く残る祭祀の詳述は、まさに学術書としてそれなのである。

後半では辻老人憩いの家や地域ふれあいデイサービスなど、那覇市の高齢者福祉サービスを受ける老年者が、自分にとってサービスは単なる受け取りなのか、健康改善に役立つのか、友人との交流の場なのか、人生の意味化ができる場なのかといったことを意味づけているとする。

また、それらのサービスから距離を置くドミトリーで生活する独居老年者のヒストリーから、必ずしも人間関係や社会的役割を構築することに意味を置くのではなく、それらの獲得をも老いる過程に内包しているのだと主張する。

筆者は「(老いは) 社会や制度状況の中で老年者が積極的ににつくり上げるものであり、そこで行われる行為の詳細な検討から理解するべきものである」と結論づけている。高齢社会イコール課題の多い社会と決めつけて、その対処方法から議論をしている高齢者福祉の発想をいったん置いてみる。個々の老年者としての老いへの向き合い方に注目して、その主体性を引き出すという豊かな発想に転換するためにも、一読する価値のある書である。(島村聡・沖縄大学准教授)



すがぬま・あやの 1981年愛知県生まれ。南山大学人類学研究所非常勤研究員。博士(人類学)。

【日曜講座 少子高齢時代】人材投資 国家戦略もって育成せよ 論説委員・河合雅司



産経新聞 2017年6月18日
昨年の出生数が100万人の
大台を割り、少子化は一段と進んだ
感がある。

だが、その影響が「深刻さ」として明確に認識されるのは、彼らが大人となる20年ほど先だろう。労働力人口の減少である。出生数は減り続けており、労働力不足は避けられない。

生産性向上で豊かさを

労働力が不足すれば生産力や消費は落ち込む。それでも豊かさを維持しようとするれば、労働生産性を

向上させるしかない。個々が生み出す製品やサービスの価値を高めることでカバーするのだ。

生産性を向上させるには、個々のスキルを磨かなければならない。とはいえ、個人での取り組みは簡単ではない。そこで政府が掲げるのが「人材投資」だ。

「経済財政運営と改革の基本方針」(骨太方針)で重点項目として打ち出した。成長分野に対応し得る能力を身につけさせ、活躍できるようにしようということだ。

これまで政府は雇用保険など所得保障に力点を置いてきたが、給付型の社会保障から能力開発型へとシフトさせていくということでもある。

能力開発によって新たな技能を身につけ、成長産業に移ることが当たり前の社会となれば、労働力不足の改善だけでなく、社会保障制度の安定にも資する。

ターゲットを絞り込め

だが、やみくもに投資を行っても生産性の向上には結びつかない。どういう人材を輩出していくのか。国家としての戦略をもって育成計画を練る必要がある。

残念ながら、骨太方針はこの点があいまいだ。人材投資というより、親への経済支援の側面が強い幼児教育・保育の無償化や待機児童の解消を「第一歩」としている。高等教育を含め、社会全体で人材投資を抜本強化するというのも散漫な印象だ。

財源には限りがある。まずはターゲットの絞り込みが重要となる。労働力不足が顕在化していることを考えれば、既に働いている人たちの能力開発から取り組みたい。

求められるのは新たな成長分野で戦力となる優秀な人材の育成である。そのためには、日本として成長の活路をどこに定めるかだ。

これまでは、高い技術力と低い賃金を背景に「ものづくり」を得意としてきた。だが、途上国も高品質な製品を生産できるようになった。

若い労働力が減ることを考えれば、いつまでも「大量生産・大量販売」モデルにしがみつくわけにはいかない。

では、日本はどのように産業構造の転換を図ればよいのだろうか。着目すべきは人口減少下で活躍が期待される女性と高齢者である。

今後の日本において成長するのは、女性や高齢者が能力を発揮しやすい知識産業のような分野となろう。

必然的に情報技術（IT）や教育、観光、医療、福祉といった分野に産業構造の転換が図られていくとみられる。

新たな仕事に必要な技能を学び直す機会を増やすことは、女性の復職・再就職や、中高年の転職や就業を促進することにもつながる。

かつて北欧諸国も製造業から知識産業への転換によって成長を実現した。人口の激減時代の日本の成長のヒントがここにある。

もちろん、製造業が全て否定されるわけではない。高品質やデザインに優れたこだわりの一品を作る「少量生産・少量販売」へとスタイルを変えていくことになるだろう。これも、大きな意味で知識産業といえよう。

企業内教育には限界も

人材投資にあたって、もう一つ重要なのは誰が教育を行うのかだ。

これまでの人材育成の主体は企業であったが、各企業の「色」に染める企業内教育は、社会が流動化していく現状にあって限界がある。

こうした点を踏まえると、企業に代わって人材育成の受け皿として期待されるのは大学や公的研究機関だ。2019年には質の高い職業人を育てる「専門職大学」が誕生する。自治体などが中心となり、再教育の仕組みを構築していくことである。

産業構造の転換には、労働市場の弾力性が不可欠だ。成長産業が転職者を積極的に採用するといった環境が整わない限り、「人材投資」の実効性は上がらない。

社会の変化に応じて何度も学び直し、ニーズに即した仕事に就けるようにする。こうした好循環をつくることなく、人口激減社会を乗り越えることはできない。

障害者も読みやすいLLブック 物語想像し会話を 神戸新聞 2017年6月18日

知的障害や自閉症などの人らのため、写真や絵記号で構成するなど、読みやすいように工夫されたLLブック「はつ恋（こい）」（樹村房）が出版された。企画者の一人、大和大学保健医療学部（大阪府吹田市）の藤澤和子教授に、親や支援者らはどう活用したらいい

のかについて聞いた。(鈴木久仁子)

LLブックはスウェーデン発祥で、海外では教育現場でも広く使われているという。藤澤教授は「中学校や高校でも広めていきたい」と話す。



「まだ社会の関心が低く、公的な支援も得られないので苦しいが、なんとか続けて作りたい」と話す藤澤和子教授=和大学

LLブック「はつ恋」の一場面写

今作は「わたしのかぞくなにが起こるかな？」(2015年)に続く第2弾。



兵庫県立ピッコロ劇団(尼崎市)の風太郎(ふうたろう)さんが制作に協力し、出演もした。

「はつ恋」は、ストーリーを写真だけで展開する。前書きには「読(よ)むことがむずかしい人に、読(よ)みやすくわかりやすく作(つく)られた本(ほん)です」と、ルビをふって書かれている。

目次にはピクトグラムといわれる絵記号が記されているので、字が読めなくても、どんな内容の章なのか分かる。1章は、海と男女の2種類の絵記号で、「海でである」ことを表現している。藤澤教授は「文字より、絵の方が理解しやすい人のためにつけた」という。

夏の浜辺で出会った2人は引かれ合い、デートし、冬のクリスマスでハッピーエンドを迎える。進展していく恋の物語を7章に分け、それぞれを5、6コマの写真でつづる。

「4コマ漫画のように思ってもらえれば分かりやすい。動きや表情で話が分かる写真を並べているので、『なんて言っているのかな』と写真を挟んで会話をしてほしい」

支援者は先走りして絵の説明をするのではなく、利用者が話し始めるのを待ち、「うれしそうな顔だね。なぜだろう」などと、登場人物の気持ちを想像して会話をするのがこつという。「文字はないので答えはない。一方通行ではなく、双方のやりとりができるのがこの本の良さ。ゆっくりじっくり味わってほしい」

また、教育現場では写真をコピーして並べ、登場人物たちの会話を吹き出しで書いてみるといいという。「ただめくるだけでなく、言語化する力を養い、自分の世界に広がりができる」と、藤澤教授は話している。

今回、写真の演出を手がけた小安展子さん(Arawas Factory)は、「どのカットも印象的に、分かりやすく、自然に」と心を砕いた。風太郎さんは、何度もリハーサルをして出演者の細かいポーズや動きを確認、小安さんと、より伝わりやすいカットを目指したという。

B5判90ページ。1728円。書店で販売中。樹村房TEL03・3868・7321

【LLブック】LLは、スウェーデン語の「やさしく読める」という言葉の略語。北欧を中心に普及し、知的障害者のほか、高齢者や移民、認知症の人にまで対象が広がっている。「わたしのかぞくなにが起こるかな？」は初版千部を完売、重版となった。「障害者差別解消法」の観点からも、広い理解と支援が求められている。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行